



(写真 4-17) 宮司から玉串をもらう



(写真 4-18) 浜降り

第4節 「馬出し祭り」に対する分析

本章の研究対象である茨城県行方市麻生町天王崎の「馬出し祭り」の中で「ヤマタノオロチ」を象徴する物は馬である。一見「蛇」とは何の関連もない「馬」が、なぜスサノオ神話に由来する疫病退散祭祀の中で「ヤマタノオロチ」の象徴として使うのか。次の文を見てみよう。

(1) 「馬出し祭り」はなぜ馬なのか

「馬出し祭り」はスサノオがヤマタノオロチを退治する神話に由来する祭りである。八岐の大蛇に見立てた飾り馬と祭神スサノオを奉じた神輿がもみ合う神事は祭りの圧巻である。ここで注意すべきところは、馬はヤマタノオロチを象徴する要素になることである。いままで本論で取り上げてきたスサノオ神話に由来する疫病退散儀礼では、ヤマタノオロチを象徴する要素はほとんど蛇に似ているものである。では、「馬出し祭り」にはなぜ馬がヤマタノオロチを象徴する要素になるのか。

先ず、馬が重要な要素として祭りの中に出てくる原因については、麻生で出版された『麻生の文化』2001年23号に、馬出し祭りの由来について1つの記載がある。それは、大蛇退治に倣い、当麻生藩主新莊が近江より当麻生藩に国換えとなり、藩の総鎮守として藩主自ら供奉して領内二十か村の役員を集めて祭りをした。この祭事は戦国の武将として一朝有事の時も十分に役に立てるように、戦場にたつて足軽の馬を引くため、また、いざ戦場にたつて大軍の中にあつて馬が動じないための調教として、祭りの時に、馬を脅かせたりするのである(羽生 2001)。

また、行方地方では、かつて、各地の神社に馬場があり、流鏝馬や競馬が行われた。現在の「馬出し祭り」の馬と神輿の対決は、昔競馬の形式からだとの説もある⁽⁴⁾。そのほか、地元の人々は現地がかつて馬の産地として有名になっていたからだとの声が高い。以上が麻生の郷土史家と一般住民の祭りにおける馬の認識であるが、一方それ以外の捉えかたもあるだろう。

桜井龍彦は馬と疫病送りとの関連についての研究の中で、馬が疫神の乗り物として民俗儀礼の中でよく出てくると論じた(桜井 2000)。桜井は神奈川県横浜市中区本牧神社の「お馬流し」と愛知県一宮市の「芝馬祭」の事例を使って、馬が祖霊信仰と御霊信仰の2つの信仰体系の中に登場するもので疫病退散儀礼と深い関連を持っているとの結論をした。また中世からの歴史文献の中で疫病神が馬に乗って夜行するなど馬と疫病退散儀礼の関連が記録されている、そのほか朝鮮半島や中国の江南地域でも疫神送りの儀礼で馬の要素が出ている(桜井 2000)。

また、奥野義雄が古代の都市と村の祭りごとの研究で、古代では祭具としての土馬が水霊(神)信仰と関連し、行疫神・祟り神の解除にも関わりがあると述べた(奥野 2000:25)。奥野により、水霊信仰つまり雨乞・請雨祈願と土馬とを結び付ける説は従来からあったが、古代の史料から見ると馬が行疫神を祭るべきものである(奥野 2000:25)。

桜井と奥野の論説により、馬は疫病神が乗るものとして、疫病退散儀礼の中で出てくるのが通常である。この論理で「馬出し祭り」を考えると、天王崎麻生八坂神社が牛頭天王を祭神として祭っていた近世に、馬は疫病神の乗り物と見なされ、「馬出し祭り」の重要な要素であった。また、写真4-14が示すように「馬出し祭り」で稚児を馬に乗って地域を巡行する場面があり、これはまさに馬を疫病神の乗り物として考えているからである。

だが、近代に入り神仏判然令により、天王崎麻生八坂神社の祭神は牛頭天王からスサノオに変更された。そのため、「馬出し祭り」は近代に入って初めてスサノオ神話と結び付けられ、祭りの中の馬がヤマタノオロチの象徴と見なされるようになった。

このように、「馬出し祭り」は天王崎麻生八坂神社の氏神牛頭天王が疫病神として、馬に乗って地域の疫病を退散する祭りで見なされたが、近代に入り神社の氏神が牛頭天王からスサノオに変更されるにより、「馬出し祭り」はスサノオがヤマタノオロチを退治する神話と関連がつけられるようになった。それゆえに、「馬出し祭り」の馬は現在でも地域の氏子に「ヤマタノオロチ」を象徴するものと見なされる。

(2) スサノオ神話との関わり

「馬出し祭り」に関する収集してきた資料は、「馬出し祭り」の由来について「スサノオがヤマタノオロチを退治する神話に由来する祭りだ」と書いている。また、氏子らも祭りの由来はスサノオ神話であると口を揃えている。「馬出し祭り」の由来は祭りの当初から、スサノオ神話であるということが定論になっているが、調査で1つのことが筆者の注意を引く。祭りの日に、筆者は氏子の案内をもらい、天王崎麻生八坂神社の社殿まで行った。社殿の壁に牛頭天王の神図が掛かっていることに気づいた(写真4-19)⁽⁵⁾。本論の第1章の分析から、現在八坂神社の祭神がスサノオであるが、神仏判然令が頒布される前には祭神が牛頭天王だということが分かった。天王崎麻生八坂神社も同じく、近代に入ってはじめ祭神が牛頭天王からスサノオになったと考えられる。

では、神社は祭神の変更が祭りの由来と何か関わりがあるだろうか。いい換えれば、「馬

出し祭り」の由来は祭りが行われる最初からスサノオ神話であるのか。この疑問は天王崎八坂神社が近代に入り、祭神が変更したことによって、さらに大きくなった。「馬出し祭り」の祭神が近世までは牛頭天王であり、近世になってからスサノオに変えられたとしたら、祭りの由来はいつからスサノオ神話と結び付くようになったのであろうか。一見矛盾した説であるが、現地の伝承者らはこれについてどのように思っているのか。次の分析から見てみよう。

「(筆者が「馬出し祭り」の由来が「スサノオがヤマタノオロチ退治する神話だといわれることを聞いて、それについて答える)

[事例 1]2013年8月 天王崎八坂神社境内で 氏子藤野保 男性 1939年生まれ

「俺がこの祭りに参加する前に「馬出し」がスサノオがヤマタノオロチの退治神話に由来すると聞いたが、ここの神社(天王崎八坂神社)の祭神がスサノオだ。これとは何か関係があるかも。でも、詳しくは分からない」

[事例 2]2014年7月 天王崎八坂神社境内で 氏子茂木明男 男性 1957年生まれ

「神話の由来は元々あった。御神輿がスサノオノミコトで、馬がヤマタノオロチだ。スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治する神話から、このお祭があった。この神社の祭神はスサノオノミコトだ。これとは何かの関連があるかなあとと思います。」

「事例 1」と「事例 2」から見ると、祭りの伝承者らにとって祭りとはスサノオ神話との関わりをあまり意識していないことが分かった。どこから伝えられた話かはすでに考察できないが、ただ単純にこのような話を聞いたことがあると氏子藤野氏が答えているように、伝承者らが祭りの由来についてほとんど先祖から聞いた話である。また、祭りを見に来る写真愛好家に祭りの意味を説明する時も、地区の氏子は神輿を馬をそれぞれ象徴する意味を写真愛好家に伝える。

このように、地域の伝承者は祭りの神話由来を一般的に詳しく理解していないことが分かる。伝承者らにとっては、先祖から伝えられてきた地域の祭りを伝承し、また地域の氏子と祭りを楽しむことが最も大事なことである。祭りの歴史と神話由来は、むしろ地域以外の人に祭りを説明する際だけの話であり、地域内部の氏子にとっては、特別な意義を持っていない。

だが、現在社殿の壁に掛けられている牛頭天王の神図から見ると、近代に入って、天王崎八坂神社の祭神が牛頭天王からスサノオに変更されてはじめて、祭りの由来がスサノオ神話と結び付くようになった可能性が非常に高いと考える。つまり、「馬出し祭り」は近代に入ってから、その由来がスサノオ神話になった。また、祭りにおける神輿と馬の象徴も、近代に入りスサノオとヤマタノオロチとなったと考える。



(写真 4-19)天王崎八坂神社の社殿
に掛かれている牛頭天王の神画

第5節 現在の「馬出し祭り」の変化

300年あまりの歴史を持つ「馬出し祭り」は現代社会において多くの変化があった。地域の伝承者はこれらの変化を経験しながら、祭りを続けている。筆者は2012年、2013年と2014年の「馬出し祭り」に参加し、当地の氏子に昭和30年代から現在までの「馬出し祭り」に関する変化について聞き取り調査をした。以下氏子に聞き取り調査内容を基づいて「馬出し祭り」の変化を述べる。

(1) 馬の数の変化

「馬出し祭り」は、名前のおり馬が祭りの中で重要な要素を占めている。2012年の「馬出し祭り」に参加する馬は3匹であったが、昭和30年代以前には祭りに参加する馬10匹もあったそうである。祭りに参加する馬の数の減少はいくつかの原因が考えられる。まず、地場産業の変化と関係がある。氏子によると、昭和30年代以前、麻生は馬の産地であり、各家に農作業のために馬を飼っていた。昭和30年代以後、農作業をする人が少なくなるのに伴い、馬を飼う実用性もなくなってきた。地場産業の変化の影響により、馬を飼う人が次第にいなくなった。馬の消失は「馬出し祭り」に大きな影響を与えた。昭和30年代以後しばらく、「馬出し祭り」で使える馬がないことは、地域の氏子を大変困らせた。そのときに、娘が3人いる家は、娘も祭りに参加できるように、にわか馬を作っていたとの話を聞いた。にわか馬の出現は、男子以外の女子でも祭りに参加できるようになったと同時に、祭りに馬がない問題もしばらく解決した。このように、昭和30年代以後の何年間か、「馬出し祭り」では本当の馬がなくなり、にわか馬を使って祭りを行っていた。だが、にわか馬は到底本当の馬ではないため、にわか馬を使ったときに祭りの時間が大幅に短くなった。

それだけでなく、氏子が祭りに参加する積極性も大きく弱まり、祭りの元々の活気が全くなくなった。「馬出し祭り」の活気を回帰するため、また祭りの様子に戻すために、行方市役所が当地の麻生馬場と連絡を取って、祭りの2日間に馬場の馬を借りて祭りをを行うことにした。このように、「馬出し祭り」はまた馬と楽しめる祭りに戻った。だが、1990年代に入り、麻生の馬場が赤字で倒産した。氏子らは当地の牧場と連絡して、また祭りの2日間に牧場の馬を借りるようになった。牧場に馬を借りることは1つ新しい問題が出てきた。それは、牧場の馬の数が馬場ほど多くないため、1日馬を借りる賃金も馬場よりずいぶん高い。

昭和30年代以前には氏子が自家で飼っている馬を祭りで使っていたため、馬の数が多いために10匹があり、少なくとも6匹の馬を使っていたそうである。だが、麻生の牧場から馬を借りて祭りをを行うようになって以来、1匹の馬が60万円もかかるため、昭和30年代以前と同じぐらいの数の馬を祭りに使うことが不可能になった。従って、1990年代までに4匹の馬を麻生馬場から借りて祭りで使うことになった。また、1990年代に入り、麻生の牧場から祭りの馬を借りるようになってから現在まで、「馬出し祭り」で使える馬が3匹になった。

そして、氏子の人数の減少も馬の数に影響を与えたと考える。新田と古宿地区氏子は人数の減少により、八坂神社の奉納金も毎年次第に少なくなってきた。「馬出し祭り」に使用できる金額が少なくなり、馬の数も減ってきた。祭りで使う馬は麻生の牧場で借りたもので、1匹の馬が1日の賃金が60万円で、氏子らにとって重い負担になっている。このような状況で、昭和30年代以後、祭りに参加する馬は10頭から4頭になり、さらに1990年代になると3頭になった。

祭りに参加する馬の数の減少について、何人かの氏子に聞き取り調査を行った。

[事例3]2013年8月 麻生八坂神社で 氏子永作清一郎 男性 1966年生まれ

「この祭りが「馬出し祭り」だから、馬が一番重要だ。昔、みんな馬を飼ってたから、馬出しの時に、みんな自分の家の馬を引いて、祭りに参加してたよ。今、農業をする人が、いなくなったから、馬もなくなった。麻生の馬は農作業で使ってたの。だけど、今、馬が、そのむこうの牧場でお金をかかって借りてきたから、2匹とか3匹だけ。昔のように、できなくなっちゃった。今、祭で、氏子みんな1人1万5千円を祓うよ。お祭のために。だけど、そのお金がほとんど馬を借りる時に使っちゃった。うん、それは、しかたがないんだ。」

[事例4]2013年8月 麻生八坂神社で 氏子茂木明男 男性 1957年生まれ

「この馬は全部牧場から借りたの。1匹60万だぞ。高いよ。今の麻生、人が昔と比べ、少ないから、奉納金も前より少なくなってきた。祭りをするのが相当のお金がかかる。馬を借りるのが一番お金かかる。今お金がないから、馬を3匹だけ借りる。20年前ぐらいはこんなに高くなかった。あの時に、まだ2つ牧場があるんだ。その内の1つが、相当大きな

牧場だ。その時に、1匹の馬が1日30万だった。今牧場が1つだけ残されるから、賃金も高くなった。だから、みんな相談して、馬を3匹になっちゃった。これから、2匹になるかもしれない。まあ、しょうがないなあ」

との話があった。氏子永作清一郎と茂木明男からの話を聞いて、祭りに参加する馬の数の減少は麻生が地場産業の構造の変化とは直接関係があり、また氏子の人数の減少も1つの原因であるということが分かった。昭和30年代以前、各家で農作業をするために馬を飼っていたが、その後馬を飼う実用性がなくなったので、馬がいつのまにか麻生で消えてしまった。また、1990年代以前の麻生は日本全国でも有名な馬の産地の1つであった。しかし、80年代中期ごろ、日本のバブル経済の影響が麻生の馬場の経営にも影響を与えて、赤字になった馬場は倒産して麻生の地場産業に波紋を投げた。麻生の馬場は相次いで倒産したことに伴い、馬場から馬を借りる賃金も相対的に上がった。結局、地場産業と直接に繋がる祭祀活動は、地域の産業構造の変更に伴い変化することに至った。神輿と対決する馬は少なくなったため、祭りでは一番人気の馬と神輿が対決する場面の規模が縮小された。地場産業の衰退は、祭りの規模まで影響を与えたことが見える。

(2) 浜降りの変化

「馬出し祭り」最後の一環として浜降りは神輿と氏子が海に入って祓いを受け、1年間疫病を近づけないように祈願する。祭りのクライマックスである神輿と馬の対決が終って、神輿と氏子の浜降りを行う。氏子らは祭りの興奮と疲れを持ちながら、神輿とともに霞ヶ浦に入って、身体と精神の清浄を求める。しかし、2012年から「馬出し祭り」は浜降りを行わなかった。祭りに参加する氏子への通知の紙にも、太字で「お神輿を大切に扱きましょう。絶対水につけないこと」と書いている。浜降りの挙行について、氏子にはそれぞれ違う意見を持っている。以下では、氏子らが浜降りの変化についての話を見てみよう。

[事例5] 2012年7月 麻生八坂神社で 氏子羽生均 男性 1938年生まれ

羽生氏との話から、「馬出し祭り」の仮屋は昭和60年前には、現在の八坂神社の向こうの場所ではなかった。昭和60(1985)年まで仮屋は神社から1キロぐらい離れ、古宿の集会所のところであった。昭和60(1985)年に、八坂神社隣の道路に堤防ができ、堤防から湖まで浜ができた。古宿の集会所が狭くて坂道であるため、仮屋も現在のほど大きくなかった。昭和62(1987)年に、古宿の集会所で大きな事故が発生した。宵祭りで神輿を天王崎八坂神社から仮屋まで担ぐ途中で、氏子らは神輿を担ぎ古宿にあった仮屋まで上がったときに、神輿を担いでいる1人が坂道に転んで、他の2人の氏子も一緒に転んで、脚を神輿に転がされた。救急車を呼んで、すばやくけがした氏子を病院まで運んだ。結局、3人の氏子が骨折することになった。昭和62(1987)年の事故で、氏子全員は相談しあい、仮屋をより広いところに移すということを決めた。天王崎八坂神社隣の堤防ができたため、新しい仮屋の

場所を現在の神社のとなりの空地に変更するようになった。

新しい仮屋のとなりに霞ヶ浦の浜があるので、昭和 62(1987)年になってはじめて、「馬出し祭り」が浜降りをするようになった。だが、羽生氏は「馬出し祭り」で浜降りをすることに、最初から現在でも反対している。羽生氏は、神輿は神が中に座っているもので、神輿を湖に入れることが、神を湖に入れることであり、神に尊敬していない態度だとの考えを持っている。そのため、2012年に神輿を1千万円かけて新しく飾り直した際に、羽生氏はこれをきっかけとして、みなに説得し、それから神輿に浜降りをしないよう主張した。祭りが行われる前に氏子の打ち合わせで、浜降りをやり続けてほしいと主張する氏子は何人かいったが、結局新しく飾り直したばかりの神輿を湖に入れたら、すぐさびるからもったいないという理由で、2012年からの3年間はとりあえず神輿で浜降りをやらないことを、氏子のみなで決めた。羽生氏は浜降りをやめることに対して、「本来の祭りに回帰してよかった」と語ったが、羽生氏以外に、浜降りをやりたい氏子らはまた違う意見を持っている。

[事例 6] 2012 年 7 月 天王崎八坂神社で 氏子 永作則雄 1968 年生まれ

「今年の春に神輿を新しくしたの。1000 万円もかかった。大体神輿を 10 年ごとに新しくする。八坂神社の神輿は「馬出し」だけじゃない、獅子舞の時も出す。お神輿を大体 10 年を使ったら、奉納金を使って新しくする。ほら、ピカピカでしょう（筆者に神輿の方向を指す）。でも、今奉納金が少なくなったので、みんな相談してこれから 15 年か 18 年ごとに新しくしたい。ほら、今年新しくしたばかりでしょう。だから、浜降りやりたくないなあ。神輿が、もったいないから。もしこれから 15 年に一回新しくするなら、今年から 3 年以内に浜降りしないほうがいい」

[事例 7] 2012 年 7 月 麻生八坂神社で 氏子茂木明男 男性 1957 年生まれ

筆者：今年には浜降りしないということを聞いたんですが、そうですか。

茂木氏：そうです。今年浜降りやらない。新しくしたばかりの。もったいないさあ。霞ヶ浦の浜に降りて、それでしばらく置くだけでいい。

筆者：それは祭りの完備性が失われる恐れがあるじゃないですか。

茂木氏：まあ、大体今祭りはそうでしょう。実際のお金の問題に関わるから、仕方がないでしょう（筆者に苦笑しながらいう）。神輿を新しくするのが結構お金かかる。1000 万円もかかるぞ。なので、神輿を大事に扱わないと。

筆者：ちょっと変な質問かもしれませんが、もし経済的な要素を別においたら、みんなは浜降りをやりたいですか。

茂木氏：うん、それは、やりたいでしょう。浜降り楽しいし。祭り 2 日もやったし、特に今日神輿を担いで馬と対決やるのが、あれ結構疲れるよ。みんなびしょびしょだ。毎年一番暑い時に「馬出し」やるから、最後に、霞ヶ浦に入って、ちょうどいい。はは。

[事例 8] 2012 年 7 月 永峯秀一氏のご自宅で 永峯秀一氏 男性 75 歳程度

筆者：今年の浜降りをやらないと聞いたのですが、そうですか。

永峯氏：そうだよ。この前の 3 月に大金をかけて神輿を飾り直したん、浜降り今年やらない。今年から 3 年以内にやらないそうです。

筆者：そうですか。毎年「馬出し祭り」の浜降りは結構にぎやかで、楽しいそうですが、今年がやらないのは、ちょっと残念ですね。

永峯氏：うん、残念だなあ。日本の祭りは浜降りですべて祭りを終るのが多いです。祭りが終わって、参加者と神輿と一緒に祓いを受けるのは日本の祭りの浜降りの意味です。つまり、普段の穢れを洗って体と心をきれいになる。「馬出し」もそうです。神輿と馬が対決し、馬がその神話の「ヤマタノオロチ」の蛇です、その対決が終って、スサノオが「ヤマタノオロチ」を退治する、スサノオ、その神輿は、氏子と一緒に霞ヶ浦に入って、祓いを受ける。いままでずっとこういうふうにやりました。でも、あなた（筆者のことを指す）もさつき聞いたと思いますが、結局今参加してくれる人が少なくなって、奉納金も少なくなった。なので、新しく飾り直した神輿をみんなもったいないと思うから、3 年以内に浜降りをやめた。

筆者：なるほどですね。じゃ、永峯さんは浜降りをして 3 年以内にやめることに対してどう思いますか。

永峯氏：本当はやめるのがよくない。だけど、今、こんな状況なので、やめるしかないでしょう。

以上の事例から、伝承者らは浜降りに対する考えを探ることができる。まず、祭りで浜降りをやめることに対して、氏子は賛成と拒否の双方の意見を持っている。羽生氏を代表とする浜降りをやめることに賛成する氏子の意見では、元々の「馬出し祭り」に浜降りがなかったのが 1 つの原因であり、また浜降りがかえって神に尊敬していない意味ではないかとの考えを持っている。一方、より若い年齢層の氏子らは祭りの最後に浜降りをするのが、神と一緒に祭りを楽しむ時間であり、暑い天気でも 1 日の祭りを頑張った体を癒すことであり、それをやめたら残念な気持ちを持っている。結局、2012 年からの 3 年間で、「馬出し祭り」の最後に神輿を担いで浜降りを行わなかった。だが、2014 年の「馬出し祭り」は天気が異常に熱くて、祭りの最後にどうしても霞ヶ浦に入りたいという氏子がいて、結局神輿の代わりに神木を担いで霞ヶ浦に入った氏子 4 人がいった。これからの「馬出し祭り」は、浜降りが神輿でなく、神木を担いで浜降りをするようになる可能性があると考えている。

新しくしたばかりの神輿をできるだけ大事に扱うために、破損の可能性がある浜降りを一時停止することに対して、氏子らはそれぞれ異なる意見を持っている。このように、氏子らは浜降りに対して違う意見を持ちながら、共同に祭りを続けている。結果としては 2012

年からの3年間で神輿を担いだ浜降りが中止になったが、このような結果に対しても、氏子らも違う捉えかたを持っている。だが、神輿を担いで浜降りをやりたい氏子は、神輿の代わりに神木を担いで浜降りをするというやり方を選らんだ。つまり、氏子の一人一人は祭りに対して、自分なりの考えを持って、自分なりの行動を取る。それと同時に、伝承者は変化しつつある儀礼の中で、自ら変化してもいい部分とできない部分に分けて儀礼を伝承している姿が見える。

(3) 祭祀組織の変化

「馬出し祭り」の祭祀組織は当屋であり、当屋を担当する家が祭りの準備活動及び祭りの運営に指導し、自宅を祭りの準備活動のために提供し、また祭りの当日に氏子らが休憩するために自宅を開放する。そのために多くの家では、当屋を引き受けると、客間を普請し直すのが慣例になっている。この費用が当屋の経済的負担の大きな部分を占めていた。また、宵祭りとは祭りの当日、祭りに参加する氏子らは当屋のもてなしを受けながら休憩する。祭りの準備活動から運営まで当屋は重要な役割を果たしていると同時に、逆に当屋にとっては祭りが大変大きな負担にもなっている。

「馬出し祭り」の当屋制はいままで古宿と新田地区の組合に支えている。古宿には9つの組合があり、新田には6つの組合がある。それぞれの組合には6軒から9軒の家がある。「馬出し祭り」の運営はいままで当番の組合から当屋を選んで、祭りを支えている。しかし、筆者が調査したところ、「馬出し祭り」の当屋制は現在厳しい状況に直面している。現在、麻生の少子化の影響により、古宿と新田地区の氏子は人数が年々減っている。当屋を担当することは、祭り全体の準備をするほかに、祭りに参加する氏子の食事の準備も必要である。組合の氏子が順番に当屋を担当するので、原則的には70年程度1回に当屋を担当するとの頻度である。だが、実際には、現在組合に属するにもかかわらず、祭りの当屋を担当しない家が多数存在している。その原因を尋ねると、人力が足りないのは最も大きな原因だと教えてもらった。そのため、現在実際に祭りの当屋を順番に回されているのは古宿と新田地区の組合を合わせて、15軒の家しかいない。

現在の当屋制の変化について、氏子に聞き取り調査を行った。

[事例9] 2104年7月 天王崎八坂神社 平野氏 女性 45歳程度

平野氏は行方市麻生町新田地区の出身であり、現在行方市商工会で勤めている。家族は2人の娘がいて、現在次女とおばあさんと一緒に住んでいる。平野家は新田地区の氏子として、毎年「馬出し祭り」に参加していた。昭和60年代に、平野氏のお父さんが3人の娘を祭りに参加できるため、にわか馬を作った。現在、子供らが祭り使っているにわか馬は平野氏のお父さんが作ったのである。2013年に平野氏のお父さんがなくなり、おばあさんが病気になりずっと入院している状態である。平野氏のおばあさんは2010年から病気になり、その前に毎年の「馬出し祭り」に参加していた。おばあさんが病気になってから、平野氏

の家は祭りの当屋をやらないことにした。前に当屋を担当した時のことを思い出し、平野氏は「うちが当屋をしていた時に、いっぱい食べ物をみんなに用意したのよ」と嬉しそうに話してくれた。だが、現在、家では妹1人としかいないので、祭りの時に見に来るのが平野氏だけである。

[事例 10] 2014年7月 永峯秀一氏の自宅で 永峯秀一氏 男性 75歳程度

筆者：当屋を担当するのが、大体何をしますか。

永峯氏：うん、事前の打ち合わせと祭りの時にみんな休憩の場所を用意するとか、祭りの各部分の調整とか。まあ、祭りの全般を見る。特にケガや事故とか起こさないように。後はみんな祭りを楽しめるように。

筆者：当屋を担当し祭りの準備をするのが大変でしょう。

永峯氏：まあ、いままでずっとそういうふうにしてきたから。われの親父も当屋をやったし、親父の親父もそうだった。昔何十年にいったん当屋をした。今は、まあ、人が少ないから、当屋をできる家がすくなくなった。うちはタクシー会社をやっているんで、息子2人がいるので、まだ当屋できるよ。

筆者：じゃ、今何年ごとに当屋を担当していますか。

永峯氏：今は、15軒があるから、まあ、15年に一回だなあ。でも、うちがこの神社に一番近いから、当屋をやらないときでも、食べ物とか、冷たい飲み物とかみんなに準備するよ。

筆者：そうですか。永峯氏は本当に祭りに熱心ですね。

永峯氏：まあ、自分の地域の祭りだからなあ。神社に近いから、休憩の時に、みんなここに集まるから、冷たい物を用意したら、熱いなあ、馬出しが一番熱い時だからなあ。

筆者：そうですね。では、永峯氏は当屋の数の減少について、どう思いますか。

永峯氏：そうですね、今人が少なくなったから、当屋を担当する家も少なくなったなあ。それはとても残念なことでもあるし、まあ、しかたがないことでもあるなあ。日本は今少子化で、全国どこのお祭りもこのような問題があると思う。人が少ないから、お祭りもだんだん縮小されています。

永峯氏は行方市麻生新田地区の出身であり、4人の兄弟次男、兄と、2人の妹がいる。1972年に同じ麻生出身の女性と結婚し、1973年に長女が生まれ、その後に2人の男の子が生まれた。今5人家族であるが、長女は結婚して専業主婦になり、長男と次男が永峯氏のタクシー会社で勤めている。永峯氏は高校を卒業してから物流の会社に入って、運転手の仕事を25年していた。1992年に麻生で麻生タクシーを立ち上げ1996年から会長の職を務め始めた。2012年まで永峯氏は麻生タクシーで20年間を働いていた。

永峯氏は筆者が調査した2014「馬出し祭り」の当屋を担当した。現在15年に1回当屋を

担当し、祭りの準備から挙行までたくさんの手間がかかるそうであるが、12年前にお父さんが無くなってから、当屋の順番になった時に、永峯氏は当屋の責任を持って、祭りの前に神輿と子供ためのわか馬の道具類をチェックし、また祭りが1人1人関係者の段取りを指導し、祭りが終わるまで祭りを見守っている。青年時代にトラックの運転手として勤めていたので日本全国の高速道路をトラックで走っていた。仕事の関係でかつて家族と一緒にいる時間が週に2日だけの時があった。自分の性格は細かいところに気づくことが苦手だと話してくれた永峯氏だが、「馬出し祭り」の当屋を担当するときに、祭りの全般を指導し、祭りの関係者の1人1人に担当する部分と注意事項を説明する姿は、とても真剣な当屋と見えた。また、お父さんから引き受けた当屋の責任をしっかりと守り、努力している姿を見せた。

以上、当屋をやめた氏子平野氏とまだ当屋を頑張っている氏子永峯氏の事例から、少子化は地域の祭祀儀礼の祭祀組織に大きな影響を与えていることが分かる。麻生町が人口の減少により、「馬出し祭り」の当屋を担当することができる組合の家は少なくなり、元々一軒の氏子が何十年に一回当屋が回ってきたが、現在15年ごとに回るようになっている。現在当屋を担当する家にとって、当屋の負担はだんだん重くなっている。

(4) 写真愛好家の到来

現在「馬出し祭り」のもう1つの変化は祭りを見に来る写真愛好家の到来である。行方市地域活性化事業が1980年代後半から開催され、それから地域活性化事業に関わる一連の開発活動が行われた。平成元(1989)年3月に「茨城の自然100選」に天王崎が選ばれた。同年、「ふるさと創生一億円の夢」のアイデア募集という活動が開発され、入賞する人に賞金10万円が送られる。また、同年にふるさと創生事業の一環として「麻生音頭」「麻生小唄」が麻生町商工会で作成される。平成2(1990)年7月に麻生町役場から東京駅の間を結ぶ高速バスが、関鉄、JRの運行により開業する。これまで麻生から東京までの交通は不便の状況が改善された。また、平成15(2003)年4月に白帆荘敷地にお土産を販売する店が建設され、3階に展望風呂を備えた「あそう温泉白帆の湯」がオープンされた。さらに、平成16(2004)年6月にあそう温泉「白帆の湯」は「夕暮れの霞ヶ浦」の魅力が誘って、利用者10万人に到達された⁽⁶⁾。

一方、平成2(1990)年11月19日に「馬出し祭り」が行方市無形民俗文化財に登録されることによって、多くの観光客を「馬出し祭り」に引きつけるようになっている。また、「馬出し祭り」は神輿と馬が激しく対決する場面が有名であり、全国から多くの写真愛好家が訪れる。より多くの写真愛好家の注目を集めるために、1995年に行方市商工会と行方市観光協会により「水辺の里 行方」写真コンテストを開催し、毎年霞ヶ浦周辺や水辺の風景をテーマにする被写体が水着モデル・観光帆船き船・「馬出し祭り」の写真を集める。毎年「馬出し祭り」が開催する際にファッション雑誌にお願いしてモデル氏を神社まで呼んできて、モデルと祭りの様子を写真で撮ってもらうことがある。

このように地域活性化事業の推進により、「馬出し祭り」を見に来る観光客の人数が1990年から大幅に増えた。特に2003年に「馬出し祭り」の所在地八坂神社から歩いて10分ぐらいのところにあそ温泉「白帆の湯」のオープンにより、さらに観光客の人数の増加を推進した。地域活性化事業の推進は「馬出し祭り」に観光客をもたらした。いままで地域の民間祭祀儀礼として地域の人々だけが参加者になった「馬出し祭り」は、「外部」の人が参加するようになった。観光客の参加は「馬出し祭り」の名をより高めたと同時に、祭りにも変化も持たされた。元々祭りの当日だけに神輿を馬の対決をしていたが、馬の数が3匹になったため、神輿との対決の時間も大幅に減っている。だが、「馬出し祭り」が最も名高い場面をより多くの観光客に見せるために、1990年代から祭り当日の前の日の宵祭りでも馬と神輿の対決が行われるようになっていた。

以上、現在の「馬出し祭り」が馬の数の変化、浜降りの変化、当屋制の変化と観光客の変化から、「馬出し祭り」は現在までの変化が分かる。かつて祭りで重要な要素を占めていた馬が、地場産業の変化により、自宅で馬を飼っていた人はいなくなり、次第に馬場や牧場へ祭りの馬を借りるようになった。現在、馬の数が元々の10匹から3匹になった。祭りで使える馬の数の減少により、祭りで神輿と馬を対決する時間が大幅に減少されてきた。また、昭和62(1987)年から始めた浜降りは、近年経済的な原因でやめられた。さらに、地域の少子化の影響により、当屋を担当することができる組合の氏子は少なくなっている。そのほか、地域活性化事業により、「馬出し祭り」は氏子だけ参加する祭りから、観光客に「見られる」祭りになるようになった。「馬出し祭り」のこれらの変化は単に地域の少子化、活性化事業の発展により起こした変化でなく、現代社会が全体の発展とともに祭りの変化が生じたと考える。では、これらの変化に対して「馬出し祭り」と緊密な関わりを持っている伝承者、及び祭りを見に来る写真愛好家はどのように捉えているのか。次の節を通して見てみよう。

第6節 変化に対する捉えかた

現代化と地域活性化事業により、「馬出し祭り」は多くの「目に見える」の変化があった。これらの「目に見える」の変化の背後に伝承者の祭祀儀礼に対する認識も変化が起きた。

(1) 当屋の視点から見る「馬出し祭り」の変化

現在「馬出し祭り」の当屋は15軒がある。ここでは当屋の永峯氏と羽生氏への聞き取り調査を通して、当屋の視点から現在「馬出し祭り」の変化及び、これから祭りの持続に対する捉えかたを見てみよう。

[事例11] 2014年7月 永峯秀一氏の自宅で 永峯秀一氏 男性 75歳程度

筆者：現在でも「馬出し祭り」を行うことによって麻生の疫病を退散することができると思いますか。

永峯氏：うん、そうです。まあ、もともと「馬出し」は疫病退散の祭りだ。麻生の氏子の1年間の疫病を払ってくれる。それはもう300年のものだから、われわれの祖先から伝わるものだ。私が知っている限りは、戦争の時にいったんやめたことがあるが、それ以外に毎年やる。でも、今祭りを行って疫病退散できるなんか信じる人があんまりいないでしょう。われわれの時代は本当にそれを信じて祭りを行ったの。今時代が変わったなあ。

筆者：そうですね。(中略)別の問題に移したいと思いますが、祭りで子供ための神輿と馬が用意したのを見ましたが、これは今の子供らが祭りに興味を持たせるという考えですか。

永峯氏：うん、それもあるんですが、やはり子供らもこの地区の氏子です。なので、麻生の祭りに参加する義務があつて、こういう参加する意識も重要だ。子供らが毎年7月に近づいたらわくわく期待しているかなあ。

筆者：私はインターネットで行方市商工会のホームページで「馬出し祭り」の宣伝を見ました。その以外に「馬出し祭り」を宣伝することもありますか。

永峯氏：それは、商工会がやったことだ。われわれはそんなことをやらない。

筆者：「馬出し祭り」を宣伝してほしいですか。

永峯氏：そもそもこれはわれわれここに住んでいる氏子がここの神様を拜むことだ。そんな宣伝するものじゃないから。

筆者：じゃ、「馬出し祭り」を見に来る観光客にも祭りを見て来てほしいですか。

永峯氏：それはあんまり関係ないと思う。観光客が来ても当然構わないけど、でも、あまりにも宣伝しちゃうと、祭りが変になっちゃうのが、あんまり好きじゃない。

以上、当屋の永峯氏の話から「馬出し祭り」の変化に対する態度が見える。現在祭りが直面する少子化・過疎化の影響で後世代に伝承する問題は徐々に表面化し、伝承者らはこの問題を解決するためにたくさんの努力をしている。例えば、現在麻生小学校の3年生は宵祭りと祭りの日に子供神輿を担ぎ、子供のためにわか馬を引き氏子地域で巡行することにする。これは子供を自分が住んでいる地域の祭りに興味を持たせる考えがあるが、小さいときから地元の集団意識を認識させる考えもあるだろう。子供らさえいれば、「馬出し祭り」の伝承が続くという考え方を持っている当屋の気持ちが分かった。

筆者は2012年「馬出し祭り」の調査では最初、当屋への聞き取りはあまりうまくいかなかった。筆者が最初に当屋を訪れたのは宵祭りの前日であった。天王崎八坂神社の宮司氏が当屋を紹介してくれた。しかし、最初当屋は、筆者が祭りに対して聞き取り調査をしたいとの願いに答えなかった。その理由を聞くと、当屋は麻生タクシーの会長を務めているので、普段の仕事に暇を取れないということである。確かに聞き取り調査が対象者の仕事

に邪魔になってはいけないと筆者も考えて、当屋の気持ちを理解した。しかし、当屋の次の理由が筆者の心を少し驚かせた。「こんな田舎のところで、このちっぽけの祭りを調査して何になるのか」と当屋は眉をしかめて筆者にこのように聞いた。当時に聞かれた筆者は当屋の話に少しびっくりして、複雑な気持ちになった。祭りに一番中心な伝承者は地域の祭祀活動にこのような気持ちを持っているとは思わなかった。

しかし、その後筆者との接触が増えたことにより、当屋は筆者の聞き取り調査に非常に協力してくれた。今ふりかえって考えたら、最初に当屋は筆者の調査を拒否したのが、筆者のような外国人に対して、自分の地域の祭祀活動を見せることに抵抗する気持ちを持っているからだろう。地域の祭祀儀礼はそもそも地域の氏子だけが参加者であるという側面から考えると、伝承者の地域の祭祀儀礼に対する素朴な信仰心が少し見えるだろう。

平成2(1990)年11月19日に、「馬出し祭り」は行方市麻生町指定無形民俗文化財に登録された。だが、氏子に対する聞き取り調査を通して、氏子らは「馬出し祭り」が無形民俗文化財に登録されたことをはっきり意識していないことに気づいた。最初にある氏子に「馬出し祭り」が1990年に無形民俗文化財に登録されたとのことについて話を聞いた時に、その氏子は「ええ、そうですか。無形民俗文化財になっているんですか。知らない。」と答えてくれた。あまりにも答えに驚いたため、ほかに当屋を含め何人かの氏子にも同じの質問を出した。結局ほとんどの氏子は「馬出し祭り」が現在麻生町指定無形民俗文化財ということに意識していない状況である。そのうち、1人の氏子だけは祭りが現在無形民俗文化財に登録されていることが知っている。だが、無形民俗文化財に登録されても、補助金をもらっていないため、ほとんどの氏子は無形民俗文化財のことをまったく意識していない。つまり、「馬出し祭り」の伝承者らはいままで、無形民俗文化財と意識していない状態で祭りを毎年行って伝承している。われわれ「外部」の人に対しては無形民俗文化財に登録されるということが、誇りのことであるかもしれないが、現地の伝承者にとっては、「馬出し祭り」が彼らの地域の祭祀儀礼であり、また日常生活の1部分である。伝承者の祭りを伝承する気持ちは、祭りが無形民俗文化財に登録された前とまったく同じである。このところから見ると、「馬出し祭り」の伝承者が儀礼に対する認識の変化、つまり儀礼の「目に見えない」変化が起きていない面が存在するといえる。

(2) 一般氏子の視点から見る「馬出し」祭りの変化

「馬出し祭り」は1人1人の氏子が行う祭祀儀礼である。祭りに参加する氏子から「馬出し祭り」の変化をどのように捉えているのか。では、以下の事例から見てみよう。

[事例12] 2012年7月 近藤氏 男性 45歳 飲食店経営 麻生出身

筆者：近藤氏は麻生の出身ですか。

近藤氏：僕は麻生生まれ麻生育ちの人間で、今親父から受け継いだラーメン店を経営している。俺が小学生のときから毎年「馬出し」を参加していた。

筆者：近藤さんは今「馬出し祭り」で何を担当していますか。

近藤氏：俺は神輿を担ぐの。大体氏子のみんな神輿を担ぐよ。今人が少ないので、青年団の人が馬を引いて巡行して、ほかの人は神輿を担ぐの。馬と対決するとき、神輿を何回も担ぐから、結構疲れる。だから、みんな交代で神輿を担ぐ。

筆者：今の「馬出し祭り」を見に来る観光客はたくさんいますね。

近藤氏：そうそう。まあ、この祭りが今行方市も祭り宣伝にいろいろやっているらしいから、見に来る人が多くなった。あと、行方市がこの祭りの写真コンテストをやった、カメラマンたくさん来てる。この前、あそう温泉もあった。観光客はこれが好きでしょう。

筆者：じゃ、行方市の宣伝が始まる前に、「馬出し祭り」は麻生の氏子だけ参加する祭りだよな。

近藤氏：そうです。今市の商工会からもいろいろ宣伝してもらった。雑誌のモデル氏も来るよ。後、写真コンテストとか。これで、観光客も来るようになったかなあ。

筆者：そうですか。

近藤氏：はい。今行方市から祭りをいろいろ宣伝するみたいで、じゃないと、誰がこんな小さいところに来るんだよ。「馬出し」なんかも見に来る人がいないでしょう。

筆者：じゃ、「馬出し祭り」を見に来る観光客が多くなったのは祭りにもいいことだと思いますか。

近藤氏：それはいいことでしょう。われわれは毎年こんな儀礼をやっていることも多くの人を知ってほしい。

筆者：じゃ、近藤氏は今「馬出し祭り」が疫病退散ができる祭りだと信じますか。

近藤氏：今なら誰もそう思わないでしょう。昔疫病にかかったら治れないからこういう祭りをやって、神様に願って、疫病を治してもらうのを願った。今、病気にかかったら病院に行くでしょう。

[事例 13] 2014年7月 天王崎八坂神社で 古宿氏子 平野氏 女性 45歳程度

平野氏：今お祭りが縮小されていますね。前は、お祭というと、うちなんかも、親戚をいっぱい呼んで、座敷いっぱい包まったの、みんな全部親戚を呼んでたと思うよ。これはもうなくなった。前は、馬出しだから、来てくださって、ご馳走を食べて、それがなくなったね。

筆者：それは大体いつからなくなったんですか。

平野氏：そうですね。うちの場合は世代が変わったときに、なくなったかなあ。十年ぐらい前かなあ。今でも呼んでる人がいるよ、家に。親戚呼んで、あもう、ご馳走を食べさせて、やっている家ありますから。

筆者：それが終わったら、一緒に祭りを見に行きますか。

平野氏：うん。そう。

筆者：じゃ、祭りの前の日に親戚を呼びますか。

平野氏：うん。そういう場合もあるし。2日間連続で祭りみたいな、もう、本当に冷蔵庫に入りきれないほどやってたんですけどね。

筆者：盛大でしたよね。

平野氏：盛大でしたね。やっぱり。今は、大体の家がやめちゃったかなあ。

筆者：じゃ、なんで今みんな祭りの時に親戚を呼ばなくなったんですか。

平野氏：そういう、こう、なんというかなあ、そういう繋がり、あんまり、日本は、もうなくなったというかね。なくなっていますよね。まだ韓国とか、お国の中国には、親戚とか、深い繋がりがあるんですけど、日本は、その、やっぱり、核家族が進んで、どんどん、こう、親戚とか、家族とのあれが繋がり、縁とか、そういうものが、どんどん、日本は、もう、ひたすら薄くなってきてるのかもしれないなあと思うね。だから、とてもこれからの日本は寂しいかなあと思うの。今1億8千万の人口が、30年後には、8千万しかなくなっちゃんでしょうね。

筆者：でも、馬出し祭りを見て、子供を参加してほしいという意識がとても強いと見えませぬ。

平野氏：そうですね。前はたぶん、その子供の神輿は中学生しかしてなかったんですけど、それをこう、小学の6年とか、5年とか、3年とか、こう、だんだん、だんだん、小さい子供も神輿を担ぐようになったんだよね。そういうように、制度を変えていかないと、この祭りそのものがこう、存続していかないじゃないかなあ。

「馬出し祭り」の氏子近藤氏と平野氏の話から以下のことが分かる。地域の少子高齢化という社会環境の下で、祭祀儀礼の伝承が厳しい状況に対し、地域活性化事業がこの状況に対応する方法だと氏子は考えている。観光客が増えるため、氏子が観光客は直接対話する機会も多くなった。自分らが一生懸命に行っている儀礼を見る「外部」の人がいるため、氏子は儀礼の伝承に更に力を尽くさないといけないうという考えを持つようになった。

(3) 写真愛好家の視点から見る「馬出し」祭りの変化

「馬出し祭り」は神輿と馬が対決する場面が祭りのクライマックスとして、毎年多くのカメラマンを引き付ける。また、行方市商工会は1995年から「馬出し祭り」の写真展とコンテストが毎年行われている。

筆者は「馬出し祭り」の当日に出会った1人のカメラマンに聞き取り調査を事例にして述べる。

[事例14]2012年7月 写真愛好家 菅谷敏男 1932年生まれ

筆者：何年から「馬出し祭り」に参加しに来るんですか。

菅谷氏：おととしから、私が住んでいる地区の撮影会に参加した。その人から「馬出し

祭り」のことを紹介してもらって、馬と神輿が対決することが珍しいといわれるので来ました。

筆者：撮った祭りの写真をコンテストに参加しますか。

菅谷氏：どうかなあ。とりあえず今日いっぱい撮って、帰ったら写真を見てから考える。

筆者：この祭りが馬と神輿の対決が有名だと知られているが、元々宵祭りでこれをやらないが、今観光客のために宵祭りにもやるようになったと聞いていたが、これについてどう思いますか。

菅谷氏：まあ、私馬と神輿が対決する場面を写真を撮りに来たので、わざわざそれを演じてもらうのがありがたいですけども。

筆者：もっとたく氏いい写真が撮れますね。

菅谷氏：そうです。人が多いから、なかなかいい写真撮れないです。もう1日やるなら、けっこういい写真撮れます。

[事例 15]2012年7月 天王崎八坂神社で 写真愛好家 A氏 男性 1947年生まれ

筆者：何年前から「馬出し祭り」の写真を撮り始めていたんですか。

A氏：8年ぐらいかなあ。そう、8年前だ。

筆者：最初にどのルートで「馬出し祭り」を知っていたんですか。

A氏：同じ撮影会の友達から紹介してもらったの。われわれの撮影会で全国珍しい祭りを紹介するのよ。

筆者：「馬出し祭り」はそのうちの1つですね。

A氏：そう、そうです。

筆者：「馬出し祭り」の写真コンテストをさきに知ってから「馬出し祭り」のことを知っているんですか。

A氏：あ、そうかも。撮影会からこのコンテストを知って、それで8年前に初めてこの祭りを見に来たんです。

筆者：祭りで何を撮りたいですか。

A氏：それは祭りの様子とか、後祭りをする人らの様子とか。

筆者：この祭りが馬と神輿の対決が有名だと知られているが、元々宵祭りでこれをやらないが、今観光客のために宵祭りにもやるようになったと聞いていたが、これについてどう思いますか。

A氏：それは知らない。それはちょっと、本末転倒じゃない。この祭りがあって、それで人が祭りを見に来た。人を見に来るために演じるのは、見る価値も失うでしょう。

「馬出し祭り」撮影コンテストの開催は全国から多くの写真愛好家を引き付けていると同時に、祭りの宣伝にもなっている。写真愛好家が撮った写真を見て「馬出し祭り」のことを知るようになる観光客も増えた。写真愛好家の立場から見ると、「馬出し祭り」が最も

「資源」になれる馬と神輿の対決の場面を繰り返し演じることは、祭祀儀礼の資源化を最大化にするほかならない。また、祭りの変化も祭りの一部分なので、それを記録する価値があると、写真愛好家らは考えている。

小括

本章では「馬出し祭り」はスサノオ神話との関わりに対する分析から見て、近代に天王崎八坂神社の祭神が牛頭天王からスサノオに変更されてから、「馬出し祭り」の由来はスサノオがヤマタノオロチ神話といわれるようになったと考える。近代日本が国民国家を志向しながら、天皇家を中心とする強力なイデオロギーのもとで、皇室の由来を明らかにするため、日本神話は直接政治的な意義が覆われるようになった。このような社会環境で、スサノオ神話は地域の疫病退散儀礼と結び付けられ、疫病退散儀礼の由来になった。

また、現代化・都市化により「馬出し祭り」は少子高齢化の影響でその継続が深刻な状況になっている。祭祀儀礼をよりよく伝承させるために、地域活性化事業の発展を通して祭祀儀礼の存続を求める道を歩くようになった。民間祭祀儀礼の保存という大きな事業に関わる行政側、伝承者側と観光客側つまり「指導側」「やる側」「見る側」はそれぞれ異なる立場で祭祀儀礼の保存を考えているため、儀礼の保存に対する行為が統一されていない。従来地域活性化事業の発展は地域の祭祀儀礼に影響を与えているとの観念は存在している。だが、本章の研究対象茨城県行方市麻生町天王崎八坂神社の「馬出し祭り」は、現代社会において生じた変化と行方市の地域活性化事業の推進との関連から見ると、祭りを地域活性化事業の一環として発展させることが必ずしも祭りに悪い影響を与えるわけではないことが分かる。「馬出し祭り」の場合では、祭りの伝承者の主体性を強調しながら祭りを行方市の地域活性化事業の一環として発展しているため、祭りの風貌がよく保存されているといえる。

「馬出し祭り」は儀礼の要素、祭祀組織及び構造の変化が生じている。これらの変化の原因は単に祭りを地域活性化事業の一環として発展するわけではなく、地域の少子化・過疎化も祭りが変化してきた1つの原因である。民間祭祀儀礼はそもそも伝承者が主体者であるので、祭祀儀礼を地域活性化資源として発展させる際により伝承者の立場を尊重し、伝承者の「主体性」を強調すべきであると考えられる。伝承者は変化しつつある儀礼の中で、自ら変化してもよい部分と変化できない部分に分けて儀礼を伝承している。これは伝承者が主体性を持って儀礼を伝承するところである。祭祀儀礼を地域活性化事業の一環として発展させる際に、伝承者の「主体性」を強調すれば、民間祭祀儀礼の持続と地域活性化事業は必ずしも矛盾するわけではない。本章の事例への分析から見て、地域の祭祀儀礼の持続を考える際に、伝承者の「主体性」を強調する重要性が分かる。

注

- (1) 麻生八坂神社の宮司により、「真体」は普段麻生八坂神社の社殿に置かれて、祭りの日にそれを社殿から取り出し、神輿の神殿に入れる。神事の祓いが終わったら、元に戻すという。祭神の「真体」は宮司以外に誰でも見せてはいけないという。
- (2) 氏子町内で巡行する際、馬が5色の吹流しで飾り、遠く見れば赤色が特別に鮮やかである。馬が巡行する際の様子と区別するため、神輿と対決する際に、真っ白の布で馬を包むことにする。
- (3) 麻生の氏子に「ヒ」と呼ばれるものは、御幣で作られ、大きき1センチメートル広さ2センチメートルの紙である。麻生の氏子により、「ヒ」は魔よけの効果があり、祭りで「ヒ」つけると家族に1年の無病息災をもたらす。そのため、祭りの参加者は神事で宮司からもらった「ヒ」を耳に挟んで祭りをを行う。
- (4) 2013年8月に氏子茂木氏に聞き取り調査による。
- (5) 天王崎八坂神社の社殿で掛かれている神図について、麻生の郷土史家羽生均氏と確認した上で、牛頭天王であることが分かった。羽生均氏は「馬出し祭り」に2本の論文を発表した。詳細は本章の参考文献に参照する。
- (6) このデータは行方市商工会の提供による。

第4章 地域の観光化と祭祀儀礼の変化 —大阪府大阪市難波「綱引き」神事を事例として—

第1節 問題提起と本章の目的

(1) 問題提起

観光庁に観光資源課が設けられているが、従来、財や遺産と呼んでいたものを資源と呼称することが流行しており、大学の大学院に文化資源学科という研究セクションが設置されているように文化資源という概念も普及し始めている（星野 2012：3）。また、日本の次代を担う産業として観光産業が注目されるに従い、観光を経済学の分野から分析する研究が盛んとなり始め、都市・地域経済学や公共経済学、資源経済学などにおける理論で観光経済学という新しい分野が生み出され、観光を経済効果の理論で分析する研究が多くされている（角本 2011：1）。しかし、観光を経済効果的な面で討論する一方、観光化の中で伝統文化を発展させることに批判する研究も出ている。「文化構造主義」的見方は、近代以降、何らかの利害関心のもとで現地の人々が伝統文化をどのように構築・再編してきたのかという過程を明らかにする。このような研究は、「これは伝統文化である」と信じている人々を驚かせる（橋本 2011：183）。

観光客を受け入れる地元の人々は、観光客が観光対象に対する期待に対応して、地元の文化を提示していくことになる。その際に、地元の文化のなかから取捨選択が行われ、文化の再構成が行われる（川森 2007：109）。「観光化」に即していえば、そのようなイメージが外部から押し付けられ、それを地元の観光の担い手がどのように受け止めて利用しているか、あるいは利用されているか、という側面の研究が必要である。さらに、イデオロギーの面から「観光化」を押し付けられて、地元の人々が自分の「主体性」に合うような操作力を持っているかどうかは、地域の祭祀儀礼を観光資源として扱う際に注意しなければいけない点だと考える。

本章では上の問題意識を念頭に置きながら分析を展開する。

(2) 本章の目的

本章ではスサノオ神話に由来する疫病退散儀礼の1つである大阪府大阪市難波「綱引き」神事を事例として、以下の分析を行いたい。まず、古い歴史を持つ祭祀儀礼が観光化される地域社会で生じた変化への考察から、伝承者は地域の観光化と祭祀儀礼の変化の関係をどのように捉えているのか。また、観光化に巻き込まれる地域の祭祀儀礼に対し、伝承者はいかに伝承活動に「主体性」を持つのかについてである。

本章が考察する手順としては、まず難波「綱引き」神事の構造に対する考察から、現代社会における難波「綱引き」神事を伝承する現状を明らかにする。次に、伝承者への聞き取り調査を通して、現在まで難波「綱引き」神事が起きた変化を捉える。最後に、地域の観光化により生じた変化、及び伝承者が神事の変化に対する認識を考察し、地域の観光化と伝統文化の伝承の関係を分析する。

第2節 研究対象の概要

大阪府大阪市難波は日本古代の国生み神話にもっとも深い関わりを持っている場所である。その理由は、この神話は淡路島を遠望する土地で形成されたと考えられ、またこの神話の背後にある祭儀が難波津で行われたことを暗示する歌謡が、『古事記』に仁徳の段に見られることである（新修大阪市史編纂委員会 1988:617）。難波八阪神社は大阪府大阪市浪速区元町に所在し、現在スサノオノミコト・クシナダヒメノミコト・ヤハシラノミコガミ⁽¹⁾を祭神とする。地下鉄南海線なんば駅から歩くと15分足らずで難波八阪神社に着く。創祀された時期は不明だが、延久年間（1069～1074）には牛頭天王社として難波地方の産土神として崇敬されていた。難波八阪神社の鳥居をくぐって、先ず目の前に巨大な獅子頭の模様の舞台があり、それが現在大阪市の有名な観光スポットとして多くの観光客を引き寄せている。毎年の行事は大中小祭全部で合わせて22件があり、その中で氏子が中心に執行するのが1月に行われる「綱引き」神事、7月13・14日の夏祭り、10月14日の秋祭り・寿齢祭である。氏子の範囲は大阪市浪速区難波元町・南堀江・北堀江に住んでいる住民で、これらの氏子は難波元町連合振興町会・高台連合振興町会・堀江連合振興町会・日本橋連合振興町会・精華連合振興町会・河原連合振興町会・塩草連合振興町会・立葉連合振興町会、以上8つの町会から構成されている。

難波「綱引き」神事は難波八阪神社で行われ、スサノオ神話に由来する神事である。平成13(2001)年に大阪市初めての無形民俗文化財に指定された。神社で配布されている「神社暦」には、難波八阪神社「綱引き」の由来が書かれている。この綱引き神事の創始年代は不明であるが、江戸時代の諸種の版本などに掲載されているところから見ると相当古くから行われていたものであろう。「難波の綱引とて、年頭（正月14日）恒例の特殊神事として世に知られた綱引神事は本社御祭神、素戔鳴尊、出雲の簸の川の上にて八岐の大蛇を退治し、万民の困苦を除かせられ、人々の生活を守り、悪疫を除き、ひろく国々の農耕殖産の道を開き興された大稜威を仰ぎ奉る故事に基づいたもので、古伝にならい八頭八尾の大綱を蛇の形に打ち上げ、其年の恵方に曳き合い、神前に祭って御神徳の高揚を願い、病疫災厄を祓い、海川山野の幸を祈り、人々の生業安定、家内安全を祈る神事である」。

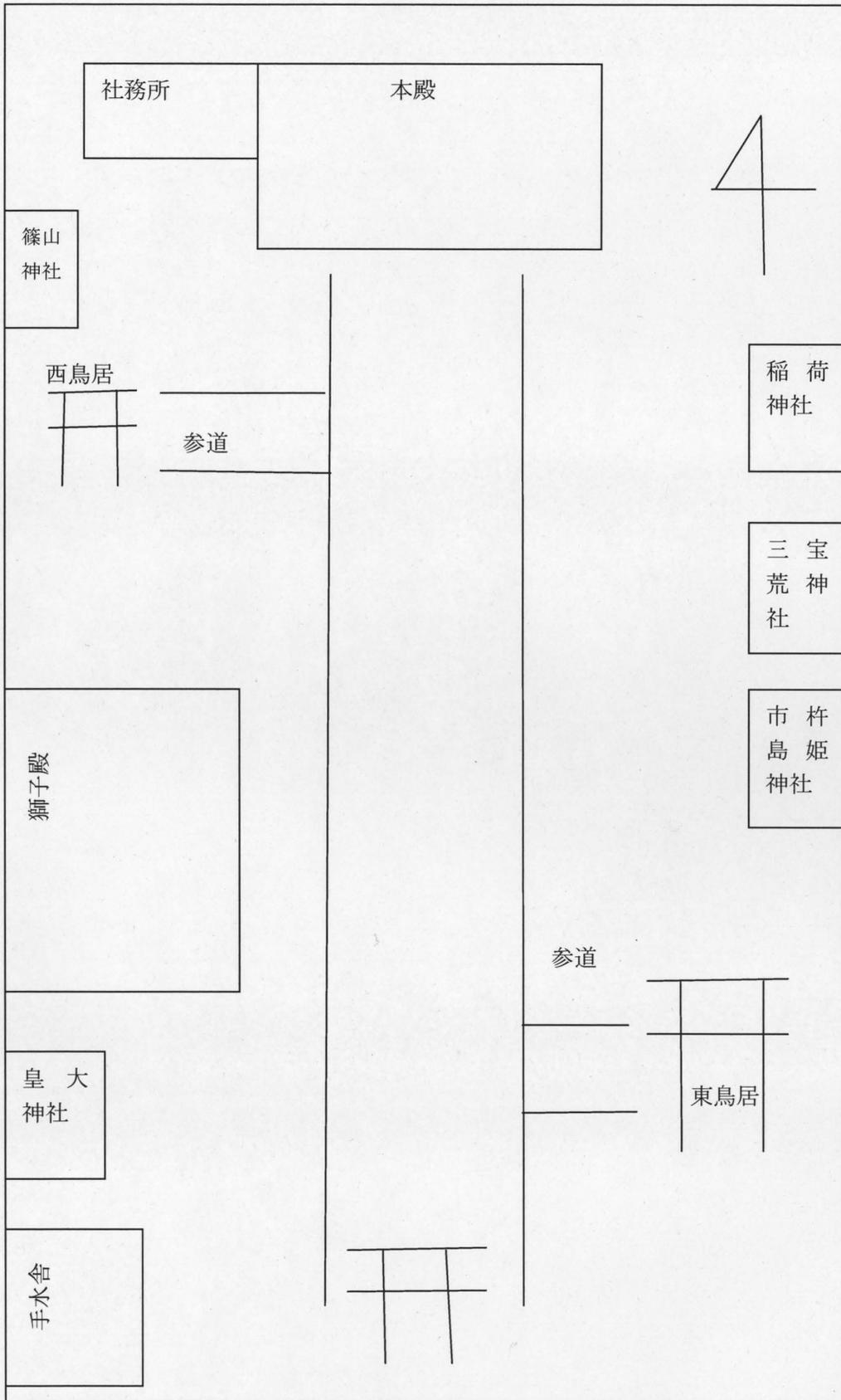
難波八阪神社では「綱引き」神事以外にも多くの行事が行われる。毎年2月3日に立春を迎え、氏子の身体健全、家内安全、厄除開運を祈願し、獅子殿で氏子崇敬者を始め年男・年女の奉仕により、追儺行事の福豆・福餅撒きが行われる。また4月第2日曜日に春の大祭が行われる。7月13日・14日の2日に夏祭りが行われ、氏子は神輿を担ぎ千日前・道頓堀・戎橋筋を巡行し、太鼓も数多く参加する祭りである。更に10月14日に秋の大祭が行われる。

難波八阪神社は本殿以外に多くの境内社が設置されている。その中で、祭神が篠山十兵衛景義公の篠山神社、祭神が宇賀御魂神・豊国稻荷大神、神徳が五穀豊穰・商売繁盛の稻荷神社、祭神が奥津日子神・奥津比賣神・火産霊神、神徳が火と台所の守り神の三宝荒神社、祭神が市杵島姫命・大物主神、神徳が産業開発・交通、海上運輸安全の市杵島姫神社、

祭神が天照皇大神・猿田彦神ご神徳が家内安全・家業発展の皇大神社がある。図 5-1 のように、境内社が難波八阪神社において多くの面積を占めている。

また、難波「綱引き」神事に関する最も早い記載は秋里籬島の 1796 年の『摂津名所図会』の記載である⁽²⁾。現代では難波「綱引き」神事に関する記載は西角井正慶が編集した『年中行事辞典』に「大阪市浪速区元町、八阪神社では陽暦の正月 14 日に綱引きを行う。同社の祭神素盞鳴尊が八岐大蛇を退治した故事にちなむといい、難波の綱引として天王寺のドヤドヤとともに名高い。綱の長さ十六間、太さ一尺五寸、重さ八十貫、これをとぐろを巻かせて祭った後、青白色の神代服に宿祢帽子をかぶった数十人の人々によって氏子町内をねり回った後、浪速区反物町の御旅所で「難波の綱引きヨイヨイヨイ」とのんびりした歌声とともに綱引きするもの」と記載されている(西角 1958)。そのほか宮本常一編集の『日本祭礼風土記』にも難波「綱引き」神事に記載があり、「この難波の綱ひきは浪速区元町の八阪神社の 1 月 14 日の行事で、もとの地が難波村とよばれた頃から伝わる古い祭りである。昔は氏子たちが集まって大綱をない、若い衆が派手な襦袢に腹巻き姿で左右に分れて鳥居の前の道で綱ひきをし、勝った方に今年福があるとしたという。大綱は大蛇を型とったものと伝え、この綱をトンドの火で焼いた灰を畑に撒くと虫除けになるといわれた。ところが明治 30 年代の再興以後は全くひきあうのを止め、これがかついで町々を廻るだけになり行列の方に美を尽すことになってしまった。戦後は車に載せてひいている」と記載されている(宮本 1962)。

(図 5-1) 難波八阪神社の構造



第3節 難波「綱引き」神事の構造

筆者は2013年と2014年の「綱引き」神事の現地調査を行った。以下、調査結果をもとに、現在の難波「綱引き」神事の構造を述べる。

現在の難波「綱引き」神事は毎年1月の第3日曜日に行われ、雨天の場合は中止されるが、その場合はかわりに春祭りに「綱引き」神事を行う。

ア 「綱引き」当日の午前8時に宮司が氏子に浄祓式を行う。神事で宮司により祝詞が唱えられ、氏子にお祓いをしてから玉串を配布する。最後に御神酒を氏子に配る。浄祓式は10分ほどで終る。

イ 神事の次に綱打ちが始まる。「ヤマタノオロチ」の象徴である綱は「綱引き」神事でもっとも重要な要素である。綱は約3時間かけて作られる。実際筆者が調査した2013年の「綱引き」神事では綱を作ることに4時間ほどかけていた。2014年の場合には4時間半もかかった。

以下は「綱」の製作手順である。まず、綱の胴体を製作する。老人会の氏子が中心で3組の綱に分けて、1組に6本の綱の束を作る。綱の束を中心に縄を時計周りに縋う(写真5-5)。できあがった3組の綱を1つの綱に縋い、綱の胴体になる。綱を時計周りに縋うことは非常に力が必要な作業で、毎年綱の両端を握って綱縋いをする氏子が8人もいる。また、氏子のみな交代で作業を行い、特にはっきりと組に分けているわけではない。だが、これは綱の胴体の一部分だけで、全体の胴体がこのようにもう1本同じく3組の綱で組み合わせられる束が必要である。つまり、2束の綱が綱の胴体になることである。できあがった2本の太綱が獅子舞台と本殿の前に交差に置かれる。本殿前に置かれる綱の一端を綱の「頭」、残りの一端をその「尾」とする。

「頭」と「尾」は、「ヤマタノオロチ」を象徴するため、綱のそれぞれ8つに作られる。8つの「頭」の中に1つを中心にし、鉄芯を入れ上に立つように立ち上げる。また、綱の胴体が2つの綱の束で十字のように交錯する真ん中の部分を「男根」の形で作り、上に立ち上げる。神社の境内に火が用意され、綱打ちで切られ不用の綱を火に捨てて燃やす。寒い中行うため、みな火の周りに立って体を温める。

最後に、綱全体の製作が終わると、氏子は観光客も誘い、束にされる綱の8つの「頭」と「尾」の部分を解きほぐす。観光客に幸福がもたらされると説明すると、大勢の人が綱の前に出て「頭」と「尾」の綱を解きほぐし始める(写真5-9)。

ウ 綱の製作が終ると、恵方に向かって綱引きをする。昔は、氏子を2つのチームに分けて綱を恵方に向かって引き、勝ったほうがこの1年の豊作豊漁が持たされるといわれていた。現在、綱引きは止められ、綱を担ぐだけにしている。「綱引き」と名乗っているが、実際に綱引きを行わない神事となっている。2013年の神事には綱の製作が終了して、氏子のみなは綱を担ぎ境内で「ヨイヨイヨイ」と唱えたが、2014年には綱の製作が例年より1時間ほど多くかかったので、境内での担ぎも行われず、直接鳥居から出て綱の巡行を行った。

エ 綱の製作が終了してから、氏子は綱を担ぎ、八阪神社を回って巡行する。かつては、1日をかけて氏子領域へ巡行していたが、現在は難波八阪神社あたりを一周回ることにし

ている。巡行する範囲は次第に縮小される傾向が見える。巡行する際に、宮司が一番前を歩き、玉櫛を持ち巡行の道を祓う。宮司の後ろに、氏子が綱の胴体を担ぐ。「頭」と「尾」が重いため、氏子が交代で担ぐようにする。また、綱の真ん中の「男根」の部分が大きいため、台車の上に乗せ、氏子が台車を押して巡行する。巡行の際に、氏子総代表は「難波のツーナヒキ」と唱え、ほかの氏子がその後「ヨーイヨイ」と唱えて、一列にぎやかに八阪神社を回って巡行する。

オ 氏子は綱を担ぎ難波八阪神社の周りを一周回り、八阪神社に戻る。綱を獅子舞台の中央にとぐろを巻くように置く。これで、神事は終了となる。綱を獅子舞台に4月まで展示し、5月に本殿の倉庫に移動して、翌年の新年祭に神社で燃やす。

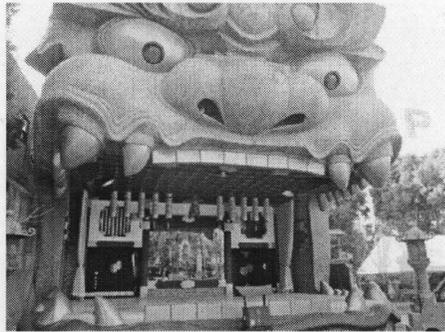
カ 「綱引き」神事が全部終わると、みなは神事が無事に終了したことを祝い、拍手を打ち、本殿の左側のテントに入って、直会を行う。本殿の左側に宮司の自宅兼社務所がある。直会の食事の準備は氏子各町会の婦人会が担当する。「綱引き」神事は近年観光客が大勢参加するので、観光客を誘い氏らと一緒に直会に参加するようになっている。直会のはじめに、氏子総代表がみなに挨拶をして、今年の「綱引き」神事が無事に終わることを祝い、また、地域来年の疫病災厄が祓われることを祈る。

(表 5-1) 2013年1月20日(日) 難波「綱引き」神事のタイムスケジュール

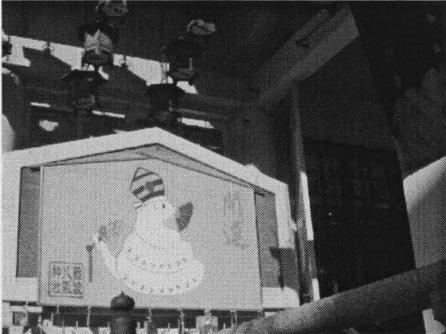
時間	参加者	内容
8:02	氏子と参加社全員	神社で集合
8:05	宮司、氏子総代会	宮司により、氏子に浄祓式を行う
8:17	綱打ち氏子	綱打ちを開始
9:05	綱打ち氏子	綱の胴体を完成
10:05	綱打ち氏子	2本の太綱を完成
10:15	綱打ち氏子	蛇体の頭と尾を編み始める
11:02	綱打ち氏子	蛇体の頭を編み終わる
11:30	綱打ち氏子	蛇体の尾を編み終わる
11:42	氏子と観光客	蛇体の頭と尾の先端を解きほぐす
12:10	氏子全員	神社周りに巡行する準備
12:20	氏子全員	大蛇を担ぎ難波八阪神社を一周回って巡行
12:40	氏子全員	大蛇を担ぐ難波八阪神社に戻る
12:42	宮司、氏子総代会	神事終了の挨拶、三本詰め
12:45	氏子全員、観光客	直会を行う
13:14	氏子	神事の後片付け



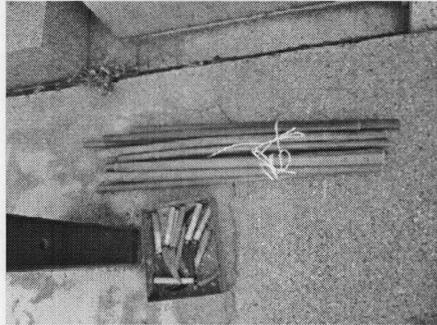
(写真 5-1) 難波八阪神社の鳥居



(写真 5-2) 獅子舞台



(写真 5-3) 難波八阪神社の絵馬



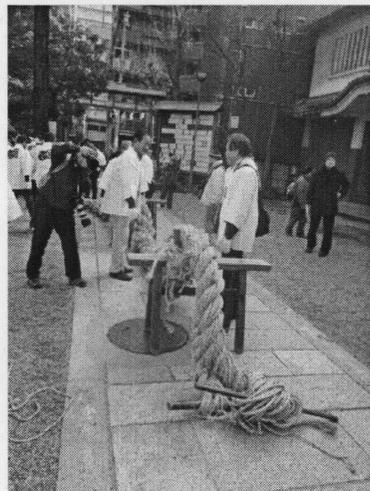
(写真 5-4) 網の製作の道具



(写真 5-5、5-6) 網の胴体を作っている



(写真 5-7) 無形民俗文化財に登録される記念碑



(写真 5-8) 網の「尾」を作っている



(写真 5-9) 綱の「尾」を解体

第4節 現在の難波「綱引き」神事の変化

難波「綱引き」神事は江戸後期に始まった神事といわれ、現在まで 300 年余りの歴史を持っている。神事が行われる難波八阪神社は、大阪市の商業の中心エリアである難波駅から数百メートルのところにある。難波駅エリアは国内外からの観光客の集中地であるため、毎年多くの観光客が訪れる。難波エリアにある神社として、難波八阪神社は観光客が観光する対象になっている。

「綱引き」神事の周知が観光客の増加に伴い、現在の「綱引き」神事では日本の全国でも名高い神事になっている。影響力も昭和 30 年代以前とは比べられないものになった。だが、観光資源として名高くなったと同時に、神事は構造から参加者まで多くの変化が起きた。次に難波「綱引き」神事に関する歴史資料と過去の調査報告書を参考しながら、現在の難波「綱引き」神事の変化を見てみよう。

(1) 綱の変化

① 綱の形の変化

「綱引き」神事の綱は神事が行われた最初の時期から数回の変化を経て現在の形になっている。現在の神事で綱は胴体の本綱と結合部の小綱をそれぞれの真ん中を縛り結びつけて作られている。本綱は綱の胴体になるので、8 頭 8 尾がある。小綱は本綱の真ん中に縛りつけ、その意味の解釈には多くの説があるが、最も人々に知られている説は、男性生殖器の象徴というものである⁽³⁾。氏子の話しから、現在の綱の結合部と比べ、昭和 30 年代のは同じく本綱と小綱で縛り付けて作られたが、大きさがずいぶん小さかった。それに対して現在の綱の結合部は大きく作っており、台車に載せて巡行することになっている。昭和 30 年代以後、神事を見にくる観光客が増えてきたことをきっかけにして、綱は昔より盛大に作られたという⁽⁴⁾。綱の結合部をより大きく作られることは、綱の特徴を強調し神事を盛大にするためだと考えている。野本寛一は平成 13(2001)年の難波「綱引き」神事に対する現地調査に基づき記録した報告書を見て、平成 13(2001)年の神事で綱の結合部は 2013 年と 2014 年の神事のものより小さく、巡行する際に氏子たちが綱の胴体を担いで巡行し、綱の結合部が台車に載せられていなかったと指摘している(野本 2001)。氏子に綱の結合部は「2006 年に難波「綱引き」神事が大阪市無形民俗文化財に登録されてから 5

周年を記念するために、綱の小綱を前より大きく作って結合部もそれによって大きく作った。それをきっかけとして結合部を台車に載せるようになった」のだという⁽⁵⁾。

以上から、綱の結合部が変化する経緯が分かった。観光客の到来及び大阪市無形民俗文化財の登録は綱がどんどん大きく作られた原因である。観光客の到来により、神事は初めて「見られる」ものになった。いままで自分の地域の祭祀行事として神事を伝承している氏子も、初めて神事の「外部」の人と神事について交流する機会があった。

②綱の数の変化

綱を盛大に作るため、結合部がどんどん大きく作られる一方、綱の数は少なくなった。難波「綱引き」神事に関する歴史資料の中では出てこなかったが、現在神事の氏子に対する聞き取り調査を通して、少なくとも昭和 40 年代以前に神事では大人用の綱と子供用の綱が 2 匹あったことが分った。以下は 2 人の氏子に綱の数の変化について行った聞き取り調査の内容である。

[事例 1] 2013 年 1 月 20 日 難波八阪神社で 氏子鈴木氏 男性 1932 年生まれ
綱の数の変化の質問に答える。

「俺が小さい時には大人と子供の綱 2 匹⁽⁶⁾作っていた。大人が担ぐ綱は、太かった。子供のはもっと細いやつで作った。俺が専門学校に出てから、就職した。その後あんまり神事に参加してなかった。でも、親父がずっと参加していた。俺が 1992 年に定年になってから、また「綱引き」に参加してきた。その時の綱がもう 1 匹になった。それで、親父から、もう、だいぶ前から、1 匹になった、昭和 40 年ごろかなあ、との話を聞いていた。やはり少子化だなあ。子供がいなくなるので、担ぎ子供もいなかっただろう。」

[事例 2] 2013 年 1 月 21 日 自宅で氏子大石氏 男性 1939 年生まれ

「昔には確かに 2 頭の綱があった。1 頭が大人が担ぎ、小さいほうが子供たちが担いだ。具体的に何年からはちょっと覚えれんやけど、大体俺がもう仕事に行ったときかなあ、1 頭になった。まあ、子供がだんだん少なくなっていたなあ。日本全国もそうだ。なので、昔子供が担いだ蛇が今なくなったかなあ。」

以上の 2 人の氏子の聞き取り調査から、昭和 40 年代以前の綱は大人用と子供用の 2 つがあったことが分った。神事で重要な要素である綱の数の変化の原因については、氏子が少子化の影響だと語った。総務省「国勢調査」昭和 40(1965)年から平成 22(2010)年大阪市の人口統計から見ると、0～14 歳の人口数が昭和 40(1965)年から減少していることが分る(表 5-1)。また、昭和 40(1965)年から平成 22(2010)年大阪市人口構成比の推移統計表から、65 歳以上の人口数は総合人口を占める比率が増える一方、0～14 歳の人口数は総合人口を占める比率が減っていることが分かる(表 5-2)。大阪市の人口統計表から、昭和 40(1965)年から人口の少子化と高齢化の状況が明らかである。地域の子供の人数の減少は子供用の綱がなくなった直接の原因の 1 つだと考える。

(表 5-1) 昭和 40(1965)年から平成 22(2010)年まで大阪市人口統計

(出典：総務省国勢調査)

年次 年齢	昭和 40(19 65) 年	昭和 45(19 70) 年	昭和 50(19 75) 年	昭和 55(19 80) 年	昭和 60(19 85) 年	平成 2(19 90) 年	平成 7(19 95) 年	平成 12(20 00) 年	平成 17(20 05) 年	平成 22(20 10) 年
0-4 歳	258, 1 82	239, 2 25	214, 6 22	156, 0 48	141, 1 80	127, 542	115, 198	113, 6 53	107, 8 89	104, 3 78
5-9 歳	209, 7 66	218, 7 20	204, 8 63	195, 0 76	147, 2 51	129, 671	114, 989	104, 6 80	107, 2 36	100, 4 31
10- 14 歳	223, 2 77	188, 0 76	196, 2 46	192, 8 46	188, 8 47	141, 106	122, 488	109, 9 56	104, 1 95	106, 1 03

(表 5-2) 昭和 40(1965)年から大阪市人口構成比の推移

(出典：総務省国勢調査)

(%)

年次	0~14 歳	15~64 歳	65 歳以上	総数
昭和 40(1965)年	21.9	73.5	4.6	100
昭和 45(1970)年	21.7	72.4	5.9	100
昭和 50(1975)年	22.2	70.3	7.5	100
昭和 55(1980)年	20.5	70.3	7.5	100
昭和 60(1985)年	18.1	71.6	10.3	100
平成 2(1990)年	15.2	73.1	11.8	100
平成 7(1995)年	13.6	72.4	14.1	100
平成 12(2000)年	12.6	70.2	17.1	100
平成 17(2005)年	12.1	67.4	20.4	100
平成 23(2010)年	11.7	65.7	22.7	100

そのほか、かつて綱を製作するための縄はその年に収穫された稲藁を 1 ヶ月干してから編んで手作りするものであった。神事まで 1 ヶ月前から氏子らは綱の製作が使える稲藁を選び、縄を作り始めた。この作業は神事の直前、前日まで続いたという。昭和 20(1945)年から、稲藁の入手が困難になったため、縄を八阪神社周辺の梱包材店で購入するようになった。現在では神事の 2 ヶ月前店に縄を注文し、神事の当日の午前中に「綱打ち」を行うため、神事の準備は大幅に縮んでいた。現在の難波「綱引き」神事は簡略化している傾向が見える。